

博士論文全体の要約

論文題目：『中国新疆オイラドの宗教復興に関する人類学的研究—寺とオワー祭祀の復活に関わる転生活仏シャリワン・ゲゲン 14 世—』

著者名：那木加甫

内容の要約

本論文は、中国北西部に位置する新疆ウイグル自治区ホボクサイル・モンゴル自治県において、オイラドという人びとのチベット仏教復興の動態を、転生活仏シャリワン・ゲゲン 14 世の存立及び寺の復活、オワー（土地神などの祭祀の場）祭祀の復活、シャリワン・ゲゲン 14 世の 2014 年急逝（円寂）という 4 つの側面から記述・分析し、民族誌として描いたものである。無神論を是とする共産党が統治する中国の社会主義的体制下において、宗教はいかに扱われてきたのか。それが何を契機に、いかに変わり 1980 年代初頭から始まった宗教復興の潮流に結びついたのか。中国における転生活仏とはいかなる存在で、チベット仏教の復興においてどのような役割を果たしてきたのか。本論文ではこうした課題に応えるため、シャリワン・ゲゲン 14 世の言動、唱道、ポリティクス及びそれらが後押しした寺とオワー祭祀の復活を明らかにし、もって現代中国における секуラリズム（政教分離主義）のあり方を議論する。

序章では、問題の所在として中国の宗教に対する政策の変遷を整理し、それらを論じた先行研究の解釈を検討したうえ、本論の課題を提示した。

第 1 章では、オイラドの起源、オイラド概念の再定義と今日のオイラド名称の多様性を始めとする基本的状況を記述し、オイラドの社会制度と調査地の概要を紹介した。

第 2 章では、転生活仏制度の由来、シャリワン・ゲゲン 14 世の宗教的な権威、世俗的な問題に応答する訓話などから、シャリワン・ゲゲンの存立をめぐるポリティクスを考察した。シャリワン・ゲゲンは転生活仏であると同時に、政府に任命され全国政治協商会委員という地位に就く世俗的官僚でもある。政府により還俗化（妻帯）させられてもなお彼は、オイラドから信奉され、仏教の中心である寺においてその宗教的権威を維持する。彼の存立をめぐるポリティクスとは、災いや病気など対個人のマイナスの場面では高僧としての聖性を発揮し、他方オワー祭祀などの対社会のプラスの場面では、聖性に加えて官僚としての俗性を活用するという使い分けであった。

第 3 章では、ホボクサイルにおいて集団化や文化大革命の時期に、財産の国有化、運営組織の解体、僧の還俗化、建物や仏像・経典の破壊、教育体制の崩壊という大きなダメージを受け

た王旗寺が、1970年代末期からの中国における民族政策の緩和によって再建される過程及びその後の宗教活動の再展開の実態を詳述した。1980年代以降の王旗寺再建の各段階及び宗教活動の再展開においては、寺の施主である旗末裔が個人（世帯）、親族、十戸、佐、旗などの様々な単位で連携しながら寄付や出資をし、また集団的巡礼を行ない、寺を経済的・社会組織的に支えた。人びとが自主的に形成した多様なコミュニティの最大規模はかつての旗に達しており、また旗と旗の間で明確な一線が引かれている。つまり、旧来の旗制度に基づく組織化が、寺の復活のための資金集めや人的資源の動員の面で重要な役割を果たしていることを明らかにした。

第4章では、ホボクサイルにおいて集団化及び文化大革命の時期に廃止されたオワー祭祀が復活した過程と、再び広がりを見せている実態を描写した。1970、80年代に復活したオワーとその祭祀及び新設されたオワーは合わせて24ヵ所に達する。この内、盟旗制度によって運営されているのは19のオワー祭祀であり、寄付金や出資者を始めとする資金調達面で自立している。各寺とオワー祭祀を主催する団体は、それぞれ自立した組織を持ち、特定のオワー祭祀に特定の寺の僧を請来するという相互依存の関係を持つ。こうした寺とオワー祭祀を支える構造は、最上位に盟、その下に旗、最下位に佐という三段階の階層体制から構成され、盟のレベルの責任者はシャリワン・ゲゲン14世で、旗のレベルでグゼティが、佐のレベルでザンギとクンドが置かれていることが明らかになった。ただし、盟旗制度による組織は現地政府に公認されておらず、民間組織の性質を持つものであり、各レベルの責任者の掌握範囲も祭祀での担当に限られている。つまり、ホボクサイルのオイラドにおける宗教復興は、転生活仏シャリワン・ゲゲン14世を頂点とする、北方遊牧社会旧来の軍政一体制度の統治機構、盟旗制度を部分的に流用することにより、成員の紐帯と財政的な自立を達成し得たのである。

第5章では、シャリワン・ゲゲン14世の円寂（2014年10月17日）後の地方政府の変化、現地社会で見られた哀悼活動、転生を願う祈禱をめぐる多様な活動を記述した。シャリワン・ゲゲン14世の円寂後、現地の信者や寺と政府との間にゲゲンという「緩衝材」がなくなり、政府の圧力が直接的に信者や寺に加わるようになった。宗教活動に対する現地政府の管理が強化された事実からは、逆説的にシャリワン・ゲゲン14世が健在していたとき、いかに彼が様々な巧みなポリティクスを行なってきたかが明らかになった。

第6章は考察と結論からなる。まず、ホボクサイルのオイラドにおける宗教復興の社会的背景を、地理的優位性、旧来の統治論理からの影響、少数派集団の危機感、功德を積む意識の4つに分けて分析した。第二の考察として、シャリワン・ゲゲン14世が宗教復興に果たした様々な役割を抽出し論じた。それは、転生活仏という側面、世俗的官僚という側面、人的資源を動

員する方途、民族分裂主義から一線を画す活動という 4 側面である。シャリワン・ゲゲン 14 世自身は、対政府との関係で「緩衝材」的な役割を果たしつつ、あるべき宗教復興運動の規模と性質をしっかりコントロールすることでオイラドを統合し、オイラドにおけるチベット仏教の復興に寄与したことが明らかになった。以上の記述と議論から、中国的なセキュラリズム・モデルは、国家と宗教を厳格に分離ないし禁止する原則を採用せず、限られた正式な宗教に対する中立性という現実的側面をも踏み出して、公認の宗教を国家が政治的に利用するというものとして提示できると結論づけた。